入らされて伐採の仕事は炭坑と同じくノルマが上がらず、そこでも相当の死者が出ました。

◎ありがとうございました。随分と苦労され、沢山の死没者を目撃され、特に正木さんを自分で埋められ、骨を持ち帰ろうとされた増川さんに頭が下がります。最後に増川さんが生き続けられた一番の理由は精神力ということに尽きると思いますが。

入ソ当時の隊長が、朝の訓辞の中で「仕事はソ連のもの、体は自分のものだ」「体を第一に考え、大切にして、日本に帰り着いてくれ」と言われた言葉が今も忘れることができません。精神的とはいえ、あれだけの非人道的な扱いの中で死んで行く、それも殺された方々が未だ凍土の中にあることを知る私たちは、一日も早く日本の土の中に埋めてあげ、眠ってもらいたいと思います。

◎ありがとうございました。随分と時間をとって下さいました。増川さんの思いと全く私も同感です。ありがとうございました。

（聞き手・全抑協広島県連会長　山田　浩造）

戦車に怯える抑留への道

熊本県　酒井國良

聞き手　本日はお忙しい中を、聞きとり調査のためにご強力いただきまして、まことにありがとうございます。

終戦後、あなたはシベリアに強制抑留をされ、しかも酷寒の地で重労働に従事させられて、引き揚げてこられました。この労苦を、再びこのようなことがないように、後世のために、ただいまよりとくとお話しをお願いしたいと思うわけでございます。では、どうぞお願いします。

酒井　私は酒井國良でございます。戦車に怯えるという意味をこれから話してみます。昭和二十年一月十五日、博多に集合し、渡満、ケイネ七〇〇〇部隊に入隊しました。初年兵は、移動に追い回されながら、一期の検閲もようやく終え、八月一日、一等兵に任命さ

れました。

八月八日の夜のこと、班長殿が命令受領から内務班に帰り、にこにこしながら「あしたは、おまえたちと牡丹江外出ということだ。ただし、班長引率に限る」という達しがありました。満州に来て初めての外出とあって床にもろくに就かず、夜半まで眠れなかった。突然けたたましいラッパの響きに目が覚めました。非常呼集で、外出の夢も一転して出動命令。

七〇〇〇部隊は、四中隊に、直ちに弾薬輸送に出発。センドウ貨物廠に野積みになっている大小の弾薬を二キロほどの山の地下壕の中に、夜を徹して二昼夜連続で輸送しました。午後、カバリン兵舎へ向けて帰途の途中、雨にたたられ、何十台もの車両の後で、最後尾の我々四中隊六分隊は、膝までぬかるみにはまり、事故が続出。鹿児島県出身の吉田君が車の下敷きになり、腹部内出血で途中で亡くなりました。そういう悲惨な事故も起き、カバリン兵舎に着いたのは夜半過ぎておりました。その疲れで、死んだ者のようにぐっすり眠りました。

十三日の早朝、牡丹江集結の命を受けて出発。六分隊が道路に出た瞬間、前夜出発して空き兵舎になっている五、六中隊の方向に、物すごい砲弾が二、三発打ち込まれました。間もなく大型の戦車が姿をのぞかせて、我々を目標に進んで来た。百メートルぐらい進んだかと思った途端、急に前の車両が馬ごと物すごい音を立てて土手に打ちつけられました。そのとき、敵の戦車であることが察せられました。

いよいよ恐ろしい追撃戦が始まったのです。我々の部隊は軽機関銃があるぐらいで、逃れるほかないので、牡丹江に向けて急いだ。カバリンパルプ工場に来た途端、フィントに何台もの車両がひっかかり、通ることもできず、うろたえていると、班長殿が馬車のまま引き返してきて、「酒井、早く車両を外して馬で逃げろ」と大声で叫んで、飛んでいきました。

車両を外しながら後方を見たら、戦車の上の蓋を開けて、こちらをのぞきながら、物すごい音を響かせて進んでくる。馬を道路下に引きおろして、またがるやいなや線路沿いに逃げた。道路には、荷物を外した車

両が満ちあふれていて、進むことができなかった。車両も折り重なって放置され、戦車も進路を阻まれていた。その間、我々は掖河にたどり着いた。

掖河では、ヤマモト隊が銃撃していた。やっと救われた。もし敵が戦車銃撃でもしていたら、ひとたまりもなく皆殺しだっただろうと、恐怖の夢を今でも時々見ることがあります。驚いて目を覚ますと、物すごい汗が出ています。

いよいよ武装解除、拉古の糧馬廠を後に約六大隊一緒に収容され、そこで二十日ぐらい滞在していたわけです。その間、少ないソ連の給与で、米という米も余り食わせられずに、もう栄養失調が大分続発しており、水を飲めば下痢をして、チフスを起こすことさえある状態でした。その後、二十日が過ぎて、九月二十八日に、チグロヤに着いたわけです。その間、大分監視兵がいて、体じゅうを検査して、主に時計とか、バンドとか、そういうものをかっぱらっていました。

ソ連に着いたときは、もう防寒被服なんかも脱がせられて、ほとんど裸の状態でソ連に入ったわけです。そして、雨外套なんかも雨が降るときにかぶっていくと、二人でそれを後ろから取り上げていくし、もうどうしようもない。警戒兵が銃を持って、後ろから着いてくるから、もうどうしようもないまま、ソ連に入っていったわけです。

そして、チグロヤに着いたのは九月二十八日。その間二か月ぐらいは、越冬準備のため土を三メートルぐらい掘って、そこに一時しのぎの小屋をつくったわけです。その小屋というのは、丸太を切って、丸太でつくり上げ、十メートルぐらいの木を四つ割にしてつくったわけです。寝床は二段になっており、中が通路になって、そんなに長くはなくて、足が届かないぐらい。やっと少し向こうの壁に足が届くような、越冬のための小屋をつくったわけです。そして、そこで二か月ぐらい過ごしました。

その後、赤軍労働大隊十二大隊に転属されたわけです。そして、この部隊は全部、伐採隊というヒガシ隊で入ったわけです。伐採が主で、入った当時は、ノコとかナタというものですが、一分隊で四組ばかりに分

かれて伐採を気ままにやっていたのですが、明けて二十一年八月ごろよりいよいよノルマが大きくなって、十立米を一組で切らなければ帰ることができないという羽目になったのです。

次第に、ソ連の警戒兵なんかがやかましく言って、切らせるようになりました。その間、十立米というノルマはなかなか毎日はできないのが本当で、たまには、ほかの班なんかにも加勢してもらったこともあります。ノルマをどうにか通していったわけですが、伐採に当たっては、松の木なんかも寒いときなどは木が凍っているものですから、折れるようなことがよくあって、途中で折れて高く舞い上がって落ちてくるということがあり、隣の熊本県出身のタカミツブンゴロウという古兵の方が、その木の下になって亡くなりました。そういう犠牲者がときどき出てきたが、ソ連としては、それを当たり前のように言って、仕事をしとげていったわけです。

たまにはソ連の警戒兵が、十立米をぜひ切らなければ帰ることはできないと、つきっきりで、遅くまで督促する。しかし切れないものは切れないので、もう知恵比べ、根気比べで、夜通し火を焚いて、切れんからと言っていたこともあるのです。そういうことが重なって、たびたびソ連の警戒兵に抗議していたのですけれども、なかなかこっちの言うことは聞いてくれないことが多かったです。

十一月ごろともなれば、山の雪もなかなか深くて、歩くにも難儀することがしばしば。山から自動車道路までなかなかおろせないところなんかが出てきて、そういうところなんかおろすのが、雪のために滑って、思わぬところに転げ落ち、そういう木の下敷きになって亡くなった方もたびたび出ているような状態でした。

ところが、うちの部隊は伐採が主でしたけれども、十一大隊は馬車の積み込みが主体で、たまには大晦日の晩なんかは、十一大隊では積み込みを拒否するので、うちの部隊に夜中ごろ命令があって、もう休んでいるのに起こされて、貨車積み込みなんかに行ったことも、二十一年、二十二年、二回にわたってあります。そういうソ連というところは、鉄道は二メートルばかり上

のところを走っているし、土場は二メートルぐらい下ですから、それに担ぎ上げて有蓋貨車に積むのですが、五トン積み込むのに二時間ぐらいかかって、ようやく積み終えて帰ったら、帰るときは既に夜が明けていることもありました。そんな苦労もあった。

ソ連の糧秣というのは、最初はパン二百グラムと砂糖十グラム、たばこ五グラムをもらっていたけれども、途中でパンが囚人から盗まれる関係で、なかなか糧秣の受領に行っても、思うように持ち帰ることができなかった。そのためパン粉をもらうようになったが、ちょうど駅から四キロ半ぐらいあったものですから、その間途中で囚人なんかが盗みに来るわけです。パンなんかも自動車で持ってくるのに、途中でとられるようなことがあったので、パン粉の代わりに今度はコーリャンをもらって、コーリャン粉精米というか、まだ良白米になっていないやつを持ってきて、雑炊にして食べていたわけです。水が主で、その中身のない、箸もかからないような雑炊を朝は食べ、昼はパン粉でつくった二百グラムのマントーと、帰って雑炊という仕組みで、ずうっと一日を暮らしていたわけです。

その間、春ともなれば雪解けになって、ようやくヨモギなんかが芽を出す季節になると、ヨモギを摘み、ソ連のモミの木の下にある馬のシメジのようなやつを取って、腹を満たしたわけです。余り食べ過ぎて、腹をこわして、また下痢をするような者も沢山いまして、そのためチフスなんかも蔓延して、相当の人が入院したが、その後、入院した人は本隊には帰らず、満州の病院へ行くと出たものの、内地には帰っていない。途中で亡くなった方が多いのではないかと思います。

糧秣というのは、本当にソ連そのものに糧秣がなかったため、ソ連の方もたまには日本のマントーをくれと言ってきた。

伐採量の検収を大げさに日本人がだました関係で、年間の伐採量が不足して、薪を日本人はよそに売ったのではないかという本部からの達しも、二、三度あった。

そういう伐採をしながら三年過ぎ、二十三年九月二十七日、チグロヤを出発し、そのころは粉雪が有蓋貨

車の上を舞うような時期になっておりました。九月二十七日、ナホトカ港に着き、それで四日ぐらいたったかと思う。そこで検査を受け、十月二日、舞鶴に上陸したものでございます。

私を守ってくれた飯盒

千葉県　諸岡逸作

私は昭和十八年十一月七日大東亜戦争の為に召集を受け、三十歳の時、佐倉五十七連隊に入隊しました。そして一週間佐倉にいて、すぐ満州第一一一部隊の駐屯する孫呉に向かいました。孫呉に着き汽車から降りてまず驚いた事はその寒さでした。見渡す限りの銀世界がまぶしいくらいで、ただ驚くばかりでした。ただちに第三機関銃中隊に編入されました。何しろ三十歳で入った初年兵です。ただ夢中でした。そして年が明けて十九年の正月三日だったと思います。戦争も激烈を加え三大隊に動員が下り殆どの戦友が勇んで出動しました。その時自分も一緒に行きたいと思いました。しかし残念ながら残されてしまいました。そして皆の出た後、間もなく師団通信に転属させられました。その頃は師団通信も平穏でした。そして毎日の仕事は師団のすぐ近くにある東風山に登り壕掘りでした。それから何日も経たないうちにソ連が参戦したとの情報が入って、間もなくソ連の飛行機が空襲に来た。機上の人が目に見える程低空だった。自分は此処で死ぬのかと思い夢中で逃げた。しかし戦争は何日も経たぬうちに終わった。

日本が負けた。そして白旗を上げた。その時の気持ちは何とも言い知れない感じだった。情勢は全く変わった。将校以下二等兵に至るまで捕虜となった。三日間歩かされ黒龍江を渡りブゴイに上陸、そして一日経って貨物列車に乗せられ七日間走って着いた所はピトロシーという地名だった。そこの寒さは孫呉よりも一段とこたえた。着るものはソ連軍のシュウバーだった。それでもまだ寒く感じた。

我々の仲間は約千人ぐらいだった。その千人が三隊